

知求会ニュース

2003年12月

第8号

◎ 訃報

5期生の鈴木清子(国際文化研究専攻)さんが、11月3日(文化の日)に享年65歳で病死されました。通夜は6日午後6時から、告別式は7日午前11時からともに竹林町・セレモニーホールコンセプト中村で執り行われました。鈴木さんは、宇都宮市明保小学校長を定年退職後に、国際学部に入學され、さらにご自身の経験と学業の成果をまとめるために国際学研究科に進学されました。修士論文の執筆という志半ばのご逝去で、さぞ無念のことと思います。鈴木さんのご冥福をこころからお祈りいたします。

◎ 国際学研究科主催第4回サテライト公開授業開催

「ワールドカップから1年 ワールドカップがもたらしたもの」という題で開催されています。会場は彩の国8番館産学交流プラザ9号室：JR宇都宮線・高崎線・京浜東北線さいたま新都心駅西口徒歩3分において、開講時間は全5回午後6時から8時45分まで。日程は、以下の通りです。

11月20日(木) ワールドカップの『遺産』をどう活用すればよいのか 中村 祐司

11月27日(木) ワールドカップからイラク戦争までー移民と現代のフランス：
エマニュエル・トッドの所論 鯨井 佑士

ワールドカップとEUのなかのドイツ：2006年開催国 渡邊 直樹

12月04日(木) ラテンアメリカの地域社会と国際関係 (スペイン語 通訳有)

ペドロ・モンREAL(ハバナ大学教授・宇都宮大学国際学部外国人教師)

12月11日(木) 北京オリンピック開催に向けて変わる中国、変わらない中国
内山 雅生

12月18日(木) 日韓交流の現況と今後の課題ーチョウナンカン(草なぎ剛)がもたらした
もの 丁 貴連

教材費二千円(全5回)、各回400円

問い合わせ先：渡邊 直樹 教授 naokiw@cc.utsunomiya-u.ac.jp

◎ 大学院国際学研究科に新専攻を設置

来年度の平成16年4月に、「国際交流研究専攻」入学定員10名で開設が予定されています。計画概要は、まず「国外での現地体験を前提とした勉学の間！」としたスローガンが掲げられています。教育目標として、第一には既に得ている体験の学問的裏付け(自らの体験の理論化)、第二には国際協力・国際貢献活動の推進能力の養成、第三には市民レベルの国際交流・国際貢献を担う人材(青年海外協力隊、NGO・NPOで指導的役

割を果たす人材)の育成が掲げられています。カリキュラムは、第一に国際交流・国際貢献活動をするに当たって必要な広い視野を与えるための授業科目群、第二に国際交流・国際貢献活動の学問的裏付けを与える授業科目群、第三に指導者的役割を果たすために必要な授業科目群、必修科目に「国際学臨地研究(インターンシップ)」(主として海外における一定期間のフィールドワークや国際貢献活動)8単位と修士論文執筆のための「国際交流特別研究」6単位が課せられています。また、国際交流・国際貢献活動経験者のために「特別選抜制度」が設けられています。来年度からは、従来の国際社会研究専攻 10名、国際文化研究専攻 10名と新専攻に加わる国際交流研究専攻 10名の三専攻の合計 30名体制になります。今後の益々の国際学研究科の発展が期待されます。なお、新専攻の入試は既存 2専攻と同様 2月 5日(水)、出願は 1月 5日(月)から 7日(水)までです。学生募集要項配布中ですので、友人・知人に声を掛けていただければ幸いです。皆様のご協力とご支援をお願いいたします。

◎ **ドイツ連邦功労十字章・授与おめでとうございます！**

国際学研究科で 1年間お世話になった、**橋本孝先生**(宇都宮大学名誉教授)がドイツ連邦共和国より長年にわたる日本とドイツの文化交流に尽くした功績で、**ドイツ連邦功労十字章**を授与されました。心からお祝い申し上げます。(記事の詳細は、「U.U.now 第 32号 2003年 10月」10ページをご覧ください。)

◎ **国際学部だより**

10月 15日(水)午後 1時 30分から、宇都宮大学学生会館多目的ホールにて、国際学部主催で、池野のぶ フェリル(元タルサジュニアカレッジ教授)講師による「アメリカから見た日本 日本から見たアメリカ —教育問題を中心に—」と題した講演会が開催されました。実演も加わった講演会で、大変好評だったようです。

◎ **APSIA(国際問題学院連合)会議出席**

12月 4日から**藤田研究科長**が、会議出席のため海外出張されました。以下のような、メッセージをいただきました。

12月 4日(木)~5日(金)、ワシントンのジョージタウン大学で開かれた APSIA 総会(2003 APSIA Deans and Directors Meeting)に参加してきました。クリントン前大統領が学んだジョージタウンは、創立 1789年とアメリカでは最も古いカトリック系の大学で、会場のコプリー・ホールも重厚そのもの。対照的に、円卓会議の雰囲気は和やかで打ち解けたものでした。“newest affiliate member school”のディーン(学部長・研究科長)として自己紹介すると、あちこちから“Welcome!”の声と笑顔がこぼれてきます。アメリカン大学のグッドマン先生とも、外部評価やシンポジウムでお世話になって以来 1年ぶりの再会をはたすことができました。

世界各国の国際問題スクールから集まった参加者は米国を中心に 41 名。ハーヴァード大ジョン・F・ケネディー・スクールのジョセフ・ナイ博士をはじめ、その多くがディーンで、ディーンたちは年 1 回のこの会議を楽しみに、また交流ネットワーク拡大の場として大切にしておられるようでした。国際学研究科・国際学部として国際交流の輪をさらにひろげられるよう、中村真先生と一緒に多くのディーンと挨拶をかわしてきました。また、交流協定締結校の復旦大学が参加していましたので、話をしたところ、中国の大学としては初めて準加盟を認められたことがわかり、「同期生」の握手をしてきました。

しかし、和やかな雰囲気での会議にも、イラク情勢は大きく影を落としていました。予定されていたポール・ウォルフォウィッツ国防副長官との昼食会が直前になって取り消されたこと、12月5日のカリキュラム円卓会議でコロンビア大学のディーン、リサ・アンダーソン中東学会会長が、米国民主義は多様性を喪失しつつあると強い懸念を表明し政策を批判したことは、イラク戦争をめぐって苦悩する米国学界の現状をしめしています。日本ではほとんど知られていませんが、米国の安全に資する国際学教育を強化するための「高等教育における国際学法案 (the International Studies in Higher Education Act)」がすでに下院を通過して上院にまわったことをその背景として指摘しておきましょう。

こうしたなかで、円卓会議では、外国語及び外国文化教育の位置づけをふくむ国際学カリキュラムについて各スクールからの報告がなされました。今回の会議ではまだ現状確認の段階でしたが、「地球社会・文化形成 (Building a Peaceful and Diversified Global Society)」という理念をもつ国際学研究科・国際学部として、APSIA校の間で今後さらに検討が深まることを期待したいと思います。

◎ 過去関連記事紹介その2

宇都宮大学「学園だより No.67」(2003.10)の 24 ページに、「イスラームとグローバリゼーション」講演会を開催と題して、渡邊直樹先生が寄稿されています。

また、宇都宮大学広報誌(U.U.now)に、知求会ニュースで紹介した関連記事(PDF)がありますので、以下にご紹介します。もし、興味のある方は、次の HP にアクセスして下さい。(<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/info/uunow/index.html>)

第 31 号(2003.7) ◎シリーズ特集 環境シリーズ(その1) 高橋若菜 ◎国際交流
大学院国際学研究科 「ムスタファ・カマル・パシャ博士の講演会を開催しました」

第 30 号(2003.4) ◎国際交流 国際学部・大学院国際学研究科
「台湾師範大学とのオンライン・カンファレンスを開催しました」

フォーラム 第4号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2003年も師走を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦勞しています。) 今回、第8号に寄稿をお願いしたのは、現役である社会の田巻研究室・坂本さんと文化の小池研究室出身で現在、名古屋大学大学院後期博士課程文学研究科在籍のキロワ・スベトラさんです。

◎ 5期生近況報告

「常識、非常識」

坂本 文子

現在私は大学院を休学し、ベトナム中部に位置する古都、フエにある「静岡ーフエ青年国際交流会館」附属日本語学校で日本語を教えています。と言いましても、今年の10月に着任したばかりで、日本語を教えることもベトナムの生活も、とにかく初めてのことばかりです。2ヶ月たって生活や仕事に慣れてきた今、ようやくスタートラインに立てたかなというところですよ。

この日本語学校は日本のNGO“ベトナムの「子どもの家」を支える会—The Japanese Association of Supporting Streetchildren’s home in Vietnam—”(以下略称JASS)によって運営されています。JASSは主にストリートチルドレンの自立支援をサポートしているNGOです。日本語学校では、10月より初級クラス(約40名1クラス)、中級クラス(約20名2クラス)が開設され、今年4月から開設している縫製クラスと合わせ、現在全4クラスが開校されています。対象は主にフエや近郊に住む高校卒業資格を持った人たちです。縫製クラスでは研修生として日本の縫製工場で働く人々を対象としています。そして、日本語学校で得られた資金は、ストリートチルドレンの支援金等に使われます。

私は大学2年のときに受けた国際協力の授業をきっかけにJASSを知り、それ以来、自分のできる範囲でお手伝いをさせていただいていました。そして、今回新たに「静岡ーフエ青年国際交流会館」附属日本語学校が設立され、それに伴って日本語を教える人材が必要だとのことで着任させていただいたわけです。

約2ヶ月間日本語教師の資格もない私が、まして社会主義を色濃く残した土地で、日本語を教えることは本当に驚きの連続でした。もう少し正確に言うと、日本語を教えることではなく、日本語を教えること通して少しずつベトナム社会が見えてくると同時に、私の23年間築き上げ、信じてきた“常識”が音を立てて崩れて行きました。

その一例を挙げますと、10月から新しいクラスを開校するにあたり、募集をかけ、期日までに申し込みをしてもらい、入学試験を行って、合格発表を行う、という日本ではごく当たり前の手順を踏んだのですが、すべてにおいて予想外のハプニングの連続でした。

まず申し込みの段階で、対象外の多くの高校生が申し込んでいたこと、そして入学試験においては、申し込みをしていない人が大勢押しかけ、初級に申し込んだ人が勝手に中級の試験を受けてみたり、その逆だったり。初級のテストを受けた後で、簡単過ぎたと自己判断で中級の試験にまぎれてみたり、会話の試験で聞いてないことをこれみよがしに日本語

でべらべらと話してみたり。さらに、合格発表を行った後も続々と「試験を受けたい。」「どうしても日本語を勉強したいんだ。」と強引に詰め寄る人たちが入れ替わり立ち代りやってきました。これは、合格発表の直後だけでなく、10月から授業が始まって1ヶ月ほど続き、悪びれる様子もなく授業のたびに誰かしら教室へ来たり、合格した生徒が親戚やら友達やらを連れてきて「親戚だから、(友達だから)入れてくれ。」と言ひ、最初は丁寧に断っていた私もあまりのしつこさにだんだんと断り方もきつくなってしまうました。これらの数々のハプニングを未然に防ごうにも、私の想像を超えたところで問題が発生しました。

ベトナム人がどうこうと言うよりもむしろ、“募集をかけ、期日までに申し込みをもらい、入学試験を行って、合格発表を行う”という手順が、これほどまでに何の意味もなさないことに私は大変驚きました。

現地の JASS で長く働いていらっしゃる日本人の先輩は、「ベトナムでは、6割うまくいけば成功だと思わないとやって行けないよ。」とのアドバイス…。抵抗は感じませんでした。が、あまりの“常識”のギャップに戸惑ったと同時に、自分は今ベトナムにいるんだと実感させられた出来事でした。

これはほんの一例で、このような衝撃が毎日のように繰り返される2ヶ月間でした。そして、私が意識もしたことがないまま身につけてきた“常識”とは、いったいなんだったのか、“常識”とは何であり、どのような意味を持つのか考えさせられる2ヶ月間でもありました。

これから少なくとも来年の9月まで私はここ、フエで日本語を教えます。10ヶ月後の私の“常識”がどのように変化するのか、そして何を変化させずに維持するのか、私自身も楽しみです。

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期在学学生)

◎ 3期生近況報告

国境を越える

キロワ・スベトラ

日本とブルガリアは遠く離れているにも関わらず伝統的に友好で結ばれています。両国の外交関係が始まって以来、来年は85年になります。最後の十数年間の間に特に社会的、経済的な面における協力が効果的です。両国における日本・ブルガリアフェスティバルが既に伝統になり、人々に人気を集めています。

7月25日から27日まで名古屋で行われた「ブルガリアフェスティバル」にはたくさんの方々が参加し、ブルガリアへの関心が新たに寄せられました。そのフェスティバルは第31代なごや民間大使であるニコライ・ボヤジエフさんにより企画されたものです。

開会式において、石坂史郎さんの演奏により、観客はブルガリアの伝統的な民族楽器ガイダの独特な音に触れることができました。ブルガリアの以外にあと1-2カ国に見られるこの珍しい楽器の魅力は石坂さんの完璧な演奏により見せられました。駐日ブルガリア共

和国大使館参事官であるヴェラ・ステファノヴァさんはブルガリアのプロフィール、日本との関係や外交における展望について語りました。

「ブルガリアの自然に魅せられて」という合い言葉で、ニコライ・ボヤジエフさんは四季を辿って、映像でブルガリアの美しい自然を紹介しました。

ブルガリア料理の魔法との出会いに強い関心が寄せられました。暑いブルガリアの夏をのりきるために伝統的なブルガリア料理の多くにはヨーグルトが登場します。

東海大学文学部ヨーロッパ文明学科教授である藤 盛美郎先生は1300年のブルガリアの歴史への旅を行いました。ティータイムをはさんで、観客はブルガリアのお菓子ーカダイフとヨーグルトを楽しみながら、ブルガリアの歴史を辿る旅に出かけました。

フェスティバルではブルガリアの映画に象徴的である「桃泥棒」という映画が日本初公開となりました。1964年に制作され、数十年間にわたり世界中の映画館を回って、多数の賞を得た映画です。エミリアン・スタネフ作家の同題目の作品を基に、ヴァロ・ラデフ監督により作られたこの映画はブルガリアを舞台とした第1次大戦下でのラブストーリーです。観客はリサー軍曹の妻とセルビア人のイヴォとの美しく、純粋な恋に魅了されました。成功を迎えたこの映画上映会をきっかけに、観客はブルガリア映画との再会を期待しています。

ブルガリアの音楽の魅力は国立音楽大学名誉教授である世界的に有名な児玉幸子先生により紹介されました。フェスティバルの一番若い観客のことも逃されてはいなかったです。子供たちは興味深くブルガリア人の子供たちに人気のあるゲームを習っていました。ヌーシャ&デテリーナブルガリア民族舞踊グループの華麗な踊りに観客が魅了され、全員踊りを通してブルガリアの独特のリズムを感じました。長い踊りのグループに日本人とブルガリア人が手を繋いで、そばにいる友人の心、文化への理解を深めました。もてなしの温かい名古屋で3日にわたり国境を越える日本とブルガリアとの友情の印象的なフェスティバルだったにちがいないです。

(国際学研究科 国際文化研究専攻 第3期修了生)

知求会ニュースも、無事2年目を配信することができました。原稿執筆者の皆様、ありがとうございました。来年度からは、「知究人」や「研究室訪問」のコーナーを企画しています。Season's Greetings! 皆様、よいお年をお迎え下さい。

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net
